

戦争は最大の人権侵害！

舞鶴引揚記念館を訪ねて

舞鶴港は1945（昭和20）年10月7日の引き揚げ第一船「雲仙丸」の入港から、1958（昭和33）年9月7日、最終船「白山丸」までの13年の長きにわたり、ソ連、中国など大陸からの引き揚げ者66万人余り、遺骨1万6千余柱を迎え入れました。



引揚記念公園に建つ記念碑

引き揚げ開始と舞鶴港

第2次世界大戦（アジア、太平洋戦争）の終結後、海外に残された日本人は、軍人・軍属が約330万人、一般邦人が約300万人以上といわれ、この人たちの速やかな帰国は国民の切なる願いでした。

政府は、1945（昭和20）年9月28日、軍港だった舞鶴をはじめ、浦賀、呉、下関、博多、

佐世保、鹿児島、横浜、仙崎、門司の全国10港を引揚港として引き揚げ事業を開始しました。

膨大な海外からの引き揚げ事業は、史上にその例を見ない民族の大移動であり、国内各地から駆けつけた肉親との再会は、明暗と哀歓を織り混ぜた人生の一大ドラマでした。

ソ連各地の収容所へ

1945（昭和20）年8月の無条件降伏直後、旧満州（中国東北部）の日本軍兵士らはソ連軍によって武装解除され、満州地区で27か所、北朝鮮地区で7か所の中間集結地に集められました。

その数は約60万人にのぼり、うち約47万2千人が、北は北極圏内から、南はカスピ海や中央アジア南部、西はモスクワ

近郊から、東は極東シベリアの最東端までの広大な地域、約1800か所の収容所に強制移送されました。軍人以外に、開拓団員、官吏、従軍看護婦、事務職員である女性も含まれていました。

抑留生活のすがた

戦争によるソ連の戦死者などは、数千万人にのぼったといわれ、荒廃・停滞した国土建設や経済復興に必要な労働力が不足しました。その労働力不足を日本人捕虜に求め、過酷な強制労働は、森林伐採や木材積み出し、鉄道建設工事とその関連作業、土木・建築・農作業、炭坑作業などすべての分野にわたっていました。

その中でもっとも過酷な労働であったと言われるのが森林伐採で、多くの犠牲者が出ました。今なおソ連各地の大地に眠ったままの犠牲者があります。

戦争は最大の人権侵害

明治時代には松山や徳島の事例のように捕虜問題に適正に対処してきた日本は、その後、捕虜を人道的に扱うべきである

と定めた1929（昭和4）年7月のジュネーブ条約を批准せず、1941（昭和16）年1月に出された「戦陣訓」を最優先にしました。このことが生命や待遇など捕虜を人道的に取り扱うことについて、兵士個人も政府も対応しえない状況に落ち入らせたようです。

戦勝国、敗戦国を問わず戦争は人々にとって、死と苦痛を与え、人間の尊厳を踏みしめる何者でもありません。「戦争は最大の人権侵害である」と言われますが、過酷な収容所生活の中で、多くの人々の生命が失われたこと、苦痛の労働実態などについて引揚記念館で展示資料などによって説明を受けました。

引揚記念公園に上り、数々の記念碑や復元された引揚桟橋を見ながら、リーダーはもちろん、一人ひとりが、あらゆる問題に対して自分自身の考えや意見をもち、発言できる生き方こそ大切と強く感じました。

（参考）

・「母なる港 舞鶴」

舞鶴引揚記念館発行

・「引揚港 舞鶴の記録」

舞鶴市役所発行

・「シベリア抑留1450日」

東京堂出版発行